The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語の助詞・助動詞類のアクセント : 一覧と使い分け，変化の方向性
Author(s)	郡，史郎
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 13-24
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77063
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語の助詞・助動詞類のアクセント

― 一覧と使い分け，変化の方向性 ―

郡　史郎

要旨 首都圏中央部で使われる助詞・助動詞類のアクセントの具体的な音形を実用性のある簡潔な形で提示するとともに，その音韻論的型を郡(2015)の基準で分類した結果にもとづき，アクセントの変異のありかたと時代変化の方向性について考察した。「さえ・すら・より」「と」「よ・ぞ」については変異が意味の違いに由来すると考えうること，変化の方向性としてアクセントの独立性が弱い型から強い型へという指向があることを述べた。

1．はじめに

郡(2015)では助詞・助動詞類のアクセントについて全体像のスケッチを提示した[1)]。しかし，そこでは分類原理の説明に重きを置いたため，音読や教育の場での実用性への配慮が不十分だった。また，個別の助詞・助動詞のアクセントの整理を秋永一枝(編)(2014)『新明解日本語アクセント辞典 第2版』のみにもとづいておこない，他の辞典等での扱いを検討しなかった。これはひとつの助詞・助動詞に対して複数のアクセント（変異形）が存在する場合に特に問題となる。そこには何らかの使い分けをするものがあるかもしれないし，新旧の違いと考えるべきものもあるだろう。実用的な観点からは，現在広く通用するアクセントを知りたいところであるし，理論的な観点からは，変異形についての情報が多いほど助詞・助動詞類の性格について理解が深まり，アクセント変化の一般的な傾向を知るにも役立つ。

秋永氏の辞典の本体には多くの助詞・助動詞類のアクセントが掲載されている。ただ，伝統的な東京の発音を重視するためかと思われるが，掲載形が現代の首都圏で主流の言いかたと異なる場合がある。また，「には」「ほどは」といった複合形のアクセントについての情報がすくない。2016年に刊行された『NHK日本語発音アクセント新辞典』にも，数は多くないが助詞・助動詞のアクセントが付表の形で提示されている。秋永氏の辞典と異なるアクセントが示されている場合もあるが，NHK新辞典の目的は「放送で用いるのにふさわしいことばの発音・アクセント」を示すということなので（「付録」p.2），やはり保守的な性格は否めず，助詞・助動詞のアクセントについても現代的ではないと思われる言いかたをあげている場合がある（「だろう」「でしょう」）。また，NHK新辞典の提示方法はかなり見やすいとは言えるが，接続する品詞別に分けている点は利便性を損なっていると私は考える[2)]。

---

1) 助詞・助動詞や接尾辞など非自立形式にも独自のアクセントがあると考え，その特徴は名詞につく場合も動詞や形容詞につく場合も変わらないと仮定した上で，一般に文中で２つのアクセント単位が連続する場合にそれらが全体としてどのような音調形をとるかというイントネーション論的な観点を導入して整理した。助詞・助動詞など学校文法の用語を使うのは実用的な観点からである。

2) ひとつの助詞・助動詞ごとに半ページなり１ページを使って，複数の名詞，動詞，形容詞につく形をまとめて示す方法が利便性が高いと思う。

そこで本稿では，実用性を考えて掲載語形の数を複合形も含めて旧稿より増やし，変異形の新旧の情報も書き入れ，名詞，動詞，形容詞につく形をまとめた一覧表の形でアクセントを示す。示すアクセントは神保格・常深千里(1932)以降の辞典・論文等の文献資料の整理結果に主にもとづくが，独自の小調査で得た情報も参考にする。一覧表には，やはり実用性の観点から，助詞・助動詞には通常含めない「ごと[全部]」「らしい[適切]」など生産性が高い接尾辞のいくつか含め（まとめて「助詞・助動詞類」と呼ぶ），アクセントも上線と下線で示す。そして，個々の助詞・助動詞類のアクセント型（解釈型）と，備考として文献資料での記載内容も一覧表に示し，それらをもとに変異形について若干の考察をおこなう。

以下では，まず2節で助詞・助動詞類のアクセントの全体像を郡(2015)とその後の考察（特に2.4節）にもとづいて概観し，3・4節で変異形についての考察を記し，最後に個々の助詞・助動詞等のアクセントの整理結果と補足情報を一覧表の形でまとめる。

2. 助詞・助動詞類のアクセントの全体像

助詞・助動詞類のアクセントは，次のⓐⓑⓒの3要素から成り立っていると分析できる。

ⓐ支配の関係： 直前の形式のアクセントを支配するか，あるいはそれに支配されるか，または自主性を保ちつつ直前に協力するかの関係。それぞれを「乗っとり型」「乗っとられ型」「協力型」と呼ぶ。

ⓑ高さの接続の型：「順接」（直前のアクセントをそのまま生かす形でつく）または「低接」（直前のアクセントに関係なく低くつく）。「順接」はさらに，アクセントとして一般に平板式（平板型）とされる動詞・形容詞の終止・連体形や連用形を尾高型にして接続する「用言尾高要求タイプ」と，平板型で接続する「用言平板要求タイプ」に分けられる。これはⓐが「協力型」の場合に問題になる。

ⓒ内部の下げ： 助詞・助動詞類等自体に下がり目があるかないか，あるとすればどこか。これは自立語のアクセントの型を決める要素と同じであり，頭高型，中高型，尾高型，平板型のように分けることができる。

以上を助詞・助動詞類の典型例とともに次の表にまとめる。記号 ˥ は下げの位置を示す。

支配の関係	高さの接続の型		典型的な助詞・助動詞類
乗っとり型			なさ˥い，ま˥い，ま˥す；ごと[全部]
乗っとられ型			[さ]せ(˥)る，な(˥)い[助動詞]，[ら]れ(˥)る
協力型	順接	用言尾高要求タイプ	な˥ど，な˥ら，な˥り；って
		用言平板要求タイプ	そ˥うだ[伝聞]，の˥み；ね[終助詞]，ほど
	低接		たち

2.1 乗っとり型

このタイプの助詞・助動詞類は,直前の形式のアクセントの独立性を奪って乗っとる形で全体の音形を決める。「ます」を例にとると，「飲む」［フ̄|ム̲］のように終止・連体形に

下がり目がある動詞に対しては「飲みます」［ノ|ミマ|ス］となり，「乗る」［ノ|ル］のように下がり目がない動詞に対しては「乗ります」［ノ|リマ|ス］となる。つまり，直前のアクセントがどうであれ，全体を［…マ|ス］の形にしてしまう。

「館（かん）」「県」「市」（以上は直前で下げる）や，「化」「性」「的」（以上は全体を平板化する）など接尾辞にはこのタイプのものが多い[3)]。

2.2 乗っとられ型

主に動詞・形容詞の未然形か連用形に接続する助動詞である。「せる・させる」を例にとると，下がり目がある「飲む」なら「飲ませる」［ノ|マセ|ル］，下がり目がない「乗る」なら「乗らせる」［ノ|ラセル］となり，「せる」の［セ］のあとで下げるかどうかが，直前の動詞本来の下がり目の有無に対応している。これは，助動詞のアクセントの独立性が直前の形式に乗っとられる形で全体の音形が決まるということである。

2.3 協力型

2.3.1 順接

助詞・助動詞が自分のアクセントの自主性を保ち，直前のアクセントも生かす。この特徴がわかりやすいのは，名詞に直接つく「なら」と「から」である。平板式の「鳥」に対する「鳥なら」「鳥から」はそれぞれ［ト|リナ|ラ］［ト|リカラ］で，助詞による違いは明らかである。しかし，頭高型の「猫」［ネ|コ］に対する「猫なら」「猫から」は，ふつうに言えば［ネ|コナラ］［ネ|コカラ］で，両者は（まったく，またはほぼ）同じ高さの動きになり，全体でひとつの単純語のような（または，それに近い）アクセントになる。ただ，ふたつの助詞の違いは潜在化するだけであって，なくなるわけではない。助詞の意味を強く意識して言う強調形では［ネ|コ|ナ|ラ］［ネ|コカ|ラ］となり，違いが顕在化しうる。

「用言尾高要求タイプの順接」と「用言平板要求タイプの順接」

順接はさらにふたつのタイプに分けられる。ふたつの違いは，単語の途中にアクセントの下がり目がないために一般に平板式(型)とされているタイプの動詞や形容詞—たとえば，「乗る」「働く」「赤い」「おいしい」—に順接の助詞や助動詞がつくときにあらわれる。

こうした動詞や形容詞は，特定の助詞や助動詞に対しては尾高型のふるまいをすると考えるべきである。一般に平板式（型）とされる動詞や形容詞に対して尾高型のふるまいをすることを要求するタイプの順接を略して「用言尾高要求タイプの順接」（たとえば「乗るか」［ノ|ル|カ］の「か」），そして，平板型としてふるまうことを要求するタイプを「用言平板要求タイプの順接」（たとえば「乗るね」［ノ|ルネ］の「ね」）と仮に呼ぶことにする）[4)]。このふたつの違いは，助動詞「だ」に接続する場合にもあらわれ，また2.4節で説明するように，助詞が連続する際のふるまいにもあらわれる。

---

3) 接尾辞には乗っとられ型（飲み物，乗り物の「物」等）も協力型（順接:「さん」，低接:「たち」等）もある。

4) この名称は郡(2015)では使用していないが，郡(2020)では使った。一般に平板式(型)とされる動詞や形容詞の終止・連体形のアクセントには，実は尾高型の場合と平板型の場合があるという考え方は，直接的には轟木靖子(1995)にもとづくが，実質的に同じことをすでに早田輝洋(1965, p.39)が述べている。

2.3.2 低接

接尾辞の「たち」は，「猫」「鳥」に対して［ネ|コタチ］［ト|リ|タチ］という形で直前のアクセントが平板式でも低くつく。これが低接である。「ら」「氏」などもこの仲間である。助詞・助動詞の場合は，低接だと積極的に言えそうなのは，告知などに使う終助詞「の」，そして「のだ」ぐらいである。告知の「の」は「好きな」［ス|キ|ナ］に対して「好きなの」［ス|キ|ナノ］，「きらいな」［キ|ライナ］に対して「きらいなの」［キ|ライナ|ノ］という形でつく[5)]。

2.4 助詞の連続

協力型の助詞をふたつ続けるとき，2番目の助詞の高さのとりかたに2種類がある。その違いは，平板式の名詞・動詞・形容詞に対して1番目の助詞が下がらずにつき，その助詞の中でも下がらず末尾が高いままのときにあらわれる。ひとつは，ⓐ2番目の助詞が1番目の最後より低くつくタイプである（「鳥に#は」［ト|リニ|ワ］など）。もうひとつは，ⓑ2番目の助詞が1番目の最後と同じ高さで続くタイプである（「鳥ほど#は」［ト|リホドワ］など，ただし［ト|リホド|ワ］のように低くつける言いかたもある）。ⓐになるのは，1番目と2番目の助詞がともに用言尾高要求タイプ，具体的には1番目が「から，で，に，へ」，2番目が「って，は，も」か「の［格助詞］」の場合である。ⓑになるのは1番目か2番目かが用言平板要求タイプの「ほど」か，2番目が用言平板要求タイプの「だけ，ね」の場合である[6)]。

3. ひとつの助詞・助動詞類のアクセントに2形があるものについて

ひとつの助詞・助動詞類のアクセントに2形があるものの中には，その違いが意味の違いに由来すると思われるものがある。この節ではこれについて述べる。このほか，旧形か新形かが資料から推測できるものがあり，それについては付表に記入したが，そこに見られる変化の傾向について4節で述べる。また，平板式の形容詞連用形+「は」のように，意味の違いでも新旧の違いでもないように思われる2形が使われているものもある。

(1)「さえ」「すら」「より」：名詞につくときのふるまいを見ると協力型で順接の助詞である。しかし，平板式（型）の動詞・形容詞に対して①［ノ|ル|サエ］と②［ノ|ルサ|エ］のような2形がある。形容詞に対する［ア|カ|イサエ］のような形は①で，［カイ］の二重母音のために下げの前倒しが生じたと見る。①と②の違いについて，これらの助詞には用言尾高要求(①)と用言平板要求の使い方(②)があるという可能性はある。しかしこうした助詞

---

5) 2.3.1 節で説明したように，動詞・形容詞の連体・終止形は実際には尾高型の場合がある。そのため，低接だと確実に判断できるのは，平板式の名詞にそのまま低くつくものである。ここでは形容動詞の連体形に低くつくものもこれに準ずると考えて，終助詞「の」を低接と見た。和田實(1969)は「しか」を低接としているが，これについては 3 節(2)を参照。「が［逆接］」「から」「けど」「し」「な［禁止］」「わ」のアクセントは，順接で用言尾高要求タイプか低接のどちらかだが，これらは名詞に直接つかないし，形容動詞の連体形にもつかないので，どちらなのかが特定できない。このようなものは本稿では便宜上一律に順接・用言尾高要求タイプとしておく。

6) 同じ用言平板要求タイプでも，「ほど」は 1 番目の助詞として使う場合は次の助詞は同じ高さにつき，「だけ」は 1 番目の助詞として使う場合は次の助詞は低くつく。この違いは，「ほど」が平板型で，「だけ」が尾高型であることによる。これは前者が名詞の「程」から，後者が「丈」からという由来を反映したもので，このふたつの助詞は名詞としての性格を残していることを示すものと思われる。

はフォーカスを置く場面で使われることが多いことを考えると，フォーカスのために助詞も際だたせて助詞本来の頭高型の動きを顕在化させる発音が固定化したのが②で，そうでない本来の発音が①かと思われる。すると，アクセントはともに用言尾高要求タイプということになる。「**かも**」も②の形をとりうるが，それも可能性を強調する言いかたであろう。

(2)「しか」：平板式（型）の語につく場合，資料には①［シ］の前で低くなる音形，②［シ］のあとで低くなる音形（文献資料では動詞にはない），③高く平らな音形（旧形と思われ，以下の考察から除外）がある。名詞に①と②があるのは，本来の型は②であるものが，［シ］の無声化で下げの前倒しをしたのが①と見るのが妥当だろう。金田一春彦(1981)がこの助詞のアクセントを「㊀」（本稿の①）としながら，「柄しか」は本稿の②にあたる［エ|シ|カ］とするのも①が下げの前倒しであるためかと思われる。もしどうしても［シ］の前で下げる必要があるならば「絵しか」と同じ［エ|シカ］でよいはずである。永田吉太郎(1935, p.92)も，無声化のため［シ］の高めがあらわれないと言う。動詞では文献資料では①だけなので，アクセントとしては協力型・順接で用言尾高要求タイプと見ることができる。やはりフォーカスを置く場面で使われることが多い助詞であることを考えると，独自調査での動詞の②は無声化環境下でもフォーカスが助詞本来の高さの動きを顕在化させた発音と考えることができる。名詞の場合も，②はフォーカスを置く場合の発音にもなりうるだろう。

(3)引用の「と」：平板式（型）の名詞や動詞に対して，①同じ高さでつく場合と，②低くつく場合がある。秋永氏の辞典本体には「と」に対して用法に言及なく①の形があげられているが，付録の表5の注1と表6の注2に「引用の『と』は平板式名詞（動詞）には低く下がってつくことが多い」とある。5節で説明する私の調査でも，名詞の場合①が多いが，②も併用または許容する人が複数いた（名詞のみ調査）。私は，②は引用であることを意識するときの「引用イントネーション」とでも呼べる言いかたではないかと考える[7)]。

(4)終助詞の「よ」「ぞ」：終助詞「よ」は，「乗る」など平板式(型)の動詞・形容詞に対して，同じ高さでつく①［ノ|ルヨ］（通常その後に疑問型上昇調のイントネーションをかける）と，低くつく②［ノ|ル|ヨ］がある。文献資料ではイントネーションへの言及なしで①をあげるものが多いが，両者にはやさしく教えるように言うか（①＋疑問型上昇調），一方的な通告として言うか（②）という使い分けがある（郡2018；轟木2008の説明は付表の「よ」の項に記載）。

①は「ね」と同じく協力型・順接で用言平板要求の使い方と見てよいだろう。問題は②だが，名詞に直接つく場合は「あれは鳥よ」［ト|リヨ］とは言えても，［ト|リ|ヨ］とは言いにくいようであること（轟木氏私信）から考えると，②は品詞にかかわらずかけられるイントネーションによるものではなく，「よ」のアクセントとして協力型・順接で用言尾高要求の使い方だと見るのがよいように思われる。本稿ではこの解釈をとっておく[8)]。「ぞ」にも発話意図にかかわる使い分けがある（轟木2008：付表の「ぞ」の項参照）。

4. 変化の方向性

助詞・助動詞類のアクセントの時代的変化としてはっきりしているのは，「たい」「だらけ」

---

7)「と」を高くつける言いかたは，強調型上昇調をかけるイントネーション（助詞上げ：郡 2020, p.181f）。

8) 轟木氏(2008 等)は②を低接と解釈する。郡(2020)でもそうしたが，本稿では扱いを変えている。

「ながら」の乗っとられ型から乗っとり型への変化である(付表の各項参照)。また,「だけ」,そしておそらく「ばかり」「そうだ[推量]」の乗っとり型から協力型への変化もある。これと同じ方向の変化の兆候があると解釈できるのが,「くらい・ぐらい」「ごと(毎)」「ずに」である。以上が支配の関係という大きな枠組での変化である。

「だろう」「でしょう」の変化(「乗るでしょう」[ノ|ルデショ|ー] → [ノ|ル|デショー] など)は大きな違いに感じられるが,型としては協力型で順接という枠組は同じで,それが用言平板要求タイプから用言尾高要求タイプへと変化したものにすぎない。「か」「が」「に」「は」「も」「や」「を」を平板式の動詞に同じ高さで続ける言いかたは,旧形か表現上の変種か判断がむずかしいが,これも用言平板要求タイプと用言尾高要求タイプの間の変異になる。

全体として「乗っとられ型→乗っとり型→協力型」という変化の方向性があると言える。この方向性は,助詞・助動詞類がみずからのアクセントの独立性を弱いものから強いものへと変えていくという傾向と見ることができ,同時に,先行する語が助詞・助動詞類に左右されず常に同じ高さの動きをとろうとする傾向と見ることができる。これは,複合語のアクセントに見られるような対等合併型への変化傾向[9],つまり前部要素も後部要素も1語としてのアクセントの性質を失うという変化傾向とは正反対の方向への指向である。

なお,たとえば接尾辞の「館」のアクセントは乗っとり型で直前で下げるタイプだが,「図書館」[ト|ショ|カン] を [ト|ショカン] と言うような新しい発音は,「ドラマ」[ド|ラマ] を [ド|ラマ] と言うような名詞としてのアクセントの平板化傾向の一環としてとらえられるべきものであって,接尾辞のアクセントの変化とは見ないでおく。

5. アクセント一覧

付表として,主な助詞・助動詞といくつかの接尾辞のアクセントを,主に神保格・常深千里(1932)以降の文献資料にもとづいて示す。複数の音形があるものについての新旧の判断は,著者個人の内省を反映したものであることが明らかな林大(1954)[1913年生まれ],早田輝洋(1965)[1935年生まれ],清水めぐみ(2001)[1967年生まれ]の記述を重視しておこなった。また,いくつかについては首都圏中央部生育で2018年の時点で10・20歳台の学生10名と30〜50歳台の3名への独自の小調査(発音調査に加え,5名については音声を聞いて選択させる調査:お世話になった方々に感謝申し上げる)の結果も参考にした。ここで新形としたのはかならずしも現在の若い世代だけのものではなく,起伏式形容詞の[シ|ロ|ク](白く)のように1950年代から辞書に掲載されてはいるが,伝統形ではないことがよく知られているものも含む。

9) 顕著なのが複合動詞での前部支配型(後部要素から見れば乗っとられ型)から対等合併型への変化である。対等合併型(郡 2015)とは「世界遺産」が[セ|カイ+イ|サン→セ|カイイ|サン]となるように,前部も後部も本来のアクセントを失う融合形態で,複合動詞の場合は,たとえば「読み直す」「泣きやむ」が前部のアクセントの違いに応じて[ヨ|ミナオス]と[ナ|キヤ|ム]だったものが[ヨ|ミナオ|ス][ナ|キヤ|ム]と,どちらも同じ型をとるようになっている。「暗号解読」のような後部要素が動作性・状態性をあらわす複合名詞では,協力型の[ア|ンゴー|カ|~~イドク~~]よりも対等合併型の[ア|ンゴーカ|イドク]のような発音が好まれつつあるようだ(陳曦 2019 参照)。「感染拡大」[カ|ンセン|カ|~~クダイ~~]→[カ|ンセンカ|クダイ]のように,ことばとしてのなじみ度が高くなることでもこの変化は生じうる。

助詞・助動詞類の内部のアクセントの上げ下げは，直前が低い場合は特に助詞等を意識した発音以外は潜在化することが多いので，その場合はこの表では記さない。備考欄とその左列のアクセント型（2節に述べた基準での分類結果）の欄では，アクセントは下げの位置を ˥ で示し，上げは強調する場合の大きなものに限り ˩ で示す。①②等の記号は音形欄のものに対応するが，それぞれの資料が例示に使っている語例は異なるので，備考欄で①②と書いているのは，あくまでその型という意味である。小86等は資料の略号（文献一覧参照）と記載ページで，秋1，秋2，秋n1，秋n2については，52項，表8等は付録の「アクセント習得法則」のもの，Nについては[245]等は付録のページ番号，独は独自調査の結果である。

文献

略称

秋永一枝（編）(1981)『明解日本語アクセント辞典 第2版』三省堂.（33刷） 秋2

秋永一枝（編）(2001)『新明解日本語アクセント辞典』三省堂.（1刷） 秋n1

秋永一枝（編）(2014)『新明解日本語アクセント辞典 第2版』三省堂.（1刷） 秋n2

上村幸雄(1989)「現代日本語 音韻」亀井孝他（編）『言語学大辞典 第2巻』三省堂. 上

NHK放送文化研究所(2016)『NHK日本語発音アクセント新辞典』日本放送出版協会.（1刷） N

金田一春彦(1943)「標準アクセントの解説」『明解國語辭典』.（1刷復刻版） 金1

金田一春彦(1952)「標準アクセントの手引き」『明解国語辞典（改訂版）』三省堂.（13刷） 金2

金田一春彦(1981)「標準アクセントへの手引き」『新明解国語辞典 第三版』三省堂.（4刷） 金3

郡史郎(2015)「助詞・助動詞のアクセントについての覚え書き—直前形式との複合形態の観点からの分類—」『音声言語の研究9』（大阪大学）63-74.

郡史郎(2018)「終助詞類のアクセントとイントネーション—『よ』『か』『の』『な』『でしょ（う）』『じゃない』，とびはね音調の『ない』—」『音声言語の研究 12』（大阪大学），13-26.

郡史郎(2020)『日本語のイントネーション—しくみと音読・朗読への応用』大修館書店.

小森法孝(1987)『日本語アクセント教室』新水社.（4刷） 小

酒井裕(1992)『音声 アクセント クリニック』凡人社.（1刷） 酒

三省堂編修所（編）(1958)『明解日本語アクセント辞典』三省堂.（1刷） 秋1

柴田武(1989)「アクセント表示について 付表」『新明解国語辞典 第三版』三省堂.（37刷） 柴

清水めぐみ(2001)「東京語の助詞のアクセント」『国語研究』（國學院大學）64, 32-63. 清

神保格・常深千里(1932)『國語發音アクセント辭典』厚生閣.（20刷） 神

田川恭識・中川千恵子(2014)「東京方言方言における形容詞連用形・終止形・連体形のアクセントについて—日本語話し言葉コーパスの分析を通して—」『音声研究』18(3), 14-26.

陳曦(2019)「京阪式アクセント話者による複合名詞のアクセントの融合・非融合—東京式アクセント話者との比較—」『日本方言研究会第109回研究発表会発表原稿集』41-48.

轟木靖子(1995)「終助詞から見た平板型動詞のアクセント」『音声学会会報』208, 1-8.

轟木靖子(2008)「東京語の終助詞の音調と機能の対応について—内省による考察—『音声言語VI』（近畿音声言語研究会），5-28. 轟

永田吉太郎(1935)「旧市域の音韻語法」斎藤秀一（編）『東京方言集』斎藤秀一. 永
（本稿付表掲載のページ番号は国書刊行会版1976のもの；記載内容は1935年版で確認・修正）

林大(1954)「アクセント私見」『跡見学園紀要』1, 71-82. 林

早田輝洋(1965)「動詞・形容詞などの活用とアクセント」『文研月報』4 月号, 30-39/73, 折り込み付表. 早

平山輝男（編）(1960)『全国アクセント辞典』東京堂出版.（25刷） 全

松村明（編）(2006)『大辞林 第三版』三省堂.（1刷）（【文節・活用形のアクセント例】） 辞

和田實(1969)「辞のアクセント」『国語研究』（国学院大学）29, 1-20.
（徳川宗賢編『論集日本語研究2 アクセント』有精堂出版1980所収）

助詞・助動詞類のアクセント一覧

	名詞		動詞		形容詞		助詞・助動詞のアクセント型	備考
	起伏式 下がり目あり	平板式 下がり目なし	起伏式 下がり目あり	平板式 下がり目なし	起伏式 下がり目あり	平板式 下がり目なし		・この欄と左のアクセント型の欄ではアクセントは下げの位置を˥で示し，上げは強調する場合の大きなものに限り「で示す ・①②等は左に示した音形に対応する；略号は本文5節参照
単語の例	**猫**	**鳥**	**飲む**	**乗る**	**白い**	**赤い**		
単独形・終止形	ネ|コ	ト|リ	ノ|ム	ノ|ル	シ|ロ|イ	①ア|カイ ②新 ア|カ|イ		形容詞平板式：アクセントが不安定なことはすでに[神]81の内省でも(1913年生まれ)；[早]は②(1935年生まれ)；[秋2](1981年)は①だが，52項で「近年，若い人人の間では」として②を記載
連体形			ノ|ム	ノ|ル	シ|ロ|イ	ア|カイ	形容詞平板式：連体形にもアカ˥イの型を使う人はいる(田川・中川2014参照)
連用形			ノ|ミ	ノ|リ	→く	→く		[秋n2]表1など
命令形			ノ|メ	ノ|レ				[秋n2]表1など；「よ」の項も参照；「せよ」はセ˥ヨ
う/よう [意周]			ノ|モ|ー	ノ|ロ|ー			乗っとり型	[秋n2]など
う/ようと [する]			ノ|モ|ート	①ノ|ロ|ート ②ノ|ロート			①乗っとり型 ②乗っとられ型	[神]33は②(トボオトシテ˥モ)；[永]89②(イヨートスル:平板)；[秋2]・[秋n2]表11注「言い切りにならないとき」は①のほか②の「傾向がある」，[N]「とする・思う」で②①の順(言い切りと「とも」では①のみ)；[酒]①(注で②もおかしくない)；[小]「とする」で①②の順
か・かと	ネ|コカ	ト|リカ	ノ|ムカ	①ノ|ル|カ (②ノ|ルカ)	シ|ロ|イカ	ア|カ|イカ	① 協力型・順接用言尾高要求	・動詞平板式：[秋n2]等は①で，[神]42のみ②(イクカ ド˥オカ)だが，②は旧形と見るべきか，あるいは表現上の変種か ・形容詞平板式：[神]42(オモ˥イカ カル˥イカ)もあり ・名詞平板式+「**かと**」：-カ˥ト・-カト(平板)：[秋2]・[秋n2]
が [格助詞]	ネ|コガ	ト|リガ	ノ|ムガ	①ノ|ル|ガ (②ノ|ルガ)	シ|ロ|イガ	ア|カ|イガ	① 協力型・順接用言尾高要求	・動詞平板式の②は旧形と見るべきか，あるいは表現上の変種か：[神]41-42②(イクガ ヨ˥イ，①も)；[秋1]表6②，注2で①も；[秋2]・[秋n2]表6①②,辞典本体①；[N][219]，[全][酒][早][小]①(用法言及なし)；[独]①(20歳台1名②併用，②許容は他にもあり) ・形容詞平板式：[神]42(イロノ アカ˥イガ ヨ˥イ)，[秋n2]
が [逆接]	ネ|コダガ	ト|リダ|ガ	ノ|ムガ	ノ|ル|ガ	シ|ロ|イガ	ア|カ|イガ	協力型・順接用言尾高要求(注5参照)	[N]は形容詞平板式を-イ˥ガ・-˥イガの順で掲載；名詞+だ+「が」は[独]で
かしら	ネ|コカシラ	ト|リカ|シラ	ノ|ムカシラ	ノ|ル|カシラ	シ|ロ|イカシラ	ア|カ|イカシラ	協力型・順接用言尾高要求カ˥シラ	[秋n2]など
がてら			ノ|ミガ|テラ	ノ|リガ|テラ			乗っとり型ガ˥テラ	[秋n2]など
かも	ネ|コカモ	ト|リカ|モ	ノ|ムカモ	ノ|ル|カモ	シ|ロ|イカモ	ア|カ|イカモ	協力型・順接用言尾高要求	・名詞：[N]；動詞・形容詞：[酒] ・動詞平板式について[独]では併用で-カ˥モあり(強調形か)
から [起点]	ネ|コカラ	ト|リカラ					協力型・順接用言尾高要求(注5参照)	・[N]など；理由の「から」とアクセントは同じと考えておく ・**「からが・からは」**は-カラ˥ガ・-カラ˥ワ：[神]44(-が)，[小](-は)
から [理由]	ネ|コダカラ	ト|リダ|カラ	ノ|ムカラ	ノ|ル|カラ	シ|ロ|イカラ	ア|カ|イカラ		・名詞+だ+「から」：[小] ・動詞平板式：[N]など，[永]89最後無声化する動詞はイクカ˥ラ等 ・形容詞平板式：[N]は-イ˥カラ・-˥イカラの順で掲載，[清]は逆
く					①旧 シ|ロク ②新 シ|ロ|ク	ア|カク	乗っ取られ型	・「寂しい」など4拍の形容詞起伏式は②になる傾向が特に強い ・②は[神][金1][金2][金3]にはないが，すでに[秋1]表4に「新」として記載(1958年)；[秋2]・[秋n2]は52項に「近年，若い人人の間では」として記載；[酒]4拍は①②の順，3拍は①のみ；[N]3拍①②，4拍②①の順；[上]①，[早]①；[清]3・4拍とも②のみ
くて					①旧 シ|ロクテ ②新 シ|ロ|クテ	ア|カ|クテ	(上記「く」に「て」が低く接続)	・形容詞起伏式：上記「く」を参照 ・形容詞平板式：[上]は「3モーラ以上」としてマルク˥テ(マル˥クテ)とするが他の資料は-˥クテ；上記「く」に「て」が低く接続し，クの無声化のため下げが前倒しになってできた形かと思われる
くは・くも					①旧 シ|ロクワ ②新 シ|ロ|クワ	①ア|カク|ワ ②ア|カ|クワ		・形容詞起伏式+「くは」：[N]3拍は②①，4拍は①②の順 ・形容詞平板式+「くは」：①は上記「く」に「は」が低く接続した形，②は「くて」に引かれた形か；[神]42①(「くも」も)，[金2]②；[秋1]表8は②で，注3に①あり，[秋2]・[秋n2]では「くも」についても同様；[早]両形(「くも」も)；[全]①②両形；[N][小]は①②の順；[酒]は3・4拍語とも①のみ；[清]①(「くも」も)；[独]両形(被調査者次第)
くなる・ない					①旧 シ|ロク ナ|ル ②新 シ|ロ|ク ナ|ル	ア|カクナ|ル		・「なる」「なる」が続く言いかた ・形容詞起伏式：[N]では3拍は①②，4拍は②①の順；[独]10・20歳台にシロクナ˥ル型を可とする者あり ・形容詞平板式：[独]「くない」は10・20歳台含めほぼアカクナ˥ルだが，「くない」は②式の言い方も併用または許容者が多い
くらい・ぐらい	①ネ|コクライ ②ネ|コク|ライ	ト|リク|ライ	①③ノ|ム クライ ②ノ|ムク|ライ	①②ノ|ルク ライ ③ノ|ルクライ	①③シ|ロ|イ クライ ②シ|ロイク|ライ	①②ア|カイ ク|ライ ③ア|カイクライ	① 協力型・順接用言平板要求ク˥ライ ② 乗っとり型ク˥ライ ③ 名詞としての平板型の「位」	・**使い分け説**(1)：名詞起伏式の①②について[清]48(グライとクライで同じ扱い)は「犬くらい怖くはない(犬なんて)」は②，「犬くらい怖いものはない(犬がいちばん怖い)」は①だが，②の人もいる(動詞の場合も)旨記載；しかし[N][205]は，名詞起伏式につく場合について，近年は①が主流と言う ・**使い分け説**(2)：[金2]・[金3]は動詞・形容詞につくときにグライ(②)とクライ(③)でアクセントを変えている；③は名詞「位」としての平板型アクセントで「このくらい」の「くらい」と同じ：なお[金2]の辞典本体では「くらい」の用法は「修飾助詞」として㊀→「ぐらい㊀㊁」，㊁「大きすぎる～のほうがよい」，㊂「降参する～なら」，「ぐらい」は㊀「これ～の大きさ」，㊁「酒～飲む」，㊂→「くらい㊀㊂」；他のほとんどの文献資料に③の掲載がないのはこれを名詞「位」または接尾辞と見るためか，あるいは旧形か ・起伏式：[秋1]・[秋n2]名詞・動詞・形容詞とも①②の順(グライ・クライで変えず)；[金1]名詞②，動詞・形容詞なし；[金2]・[金3]名詞②，動詞・形容詞③(クライ)，②(グライ)，ただし[金3]は形容詞なし；[岡]名詞①②(グライ・クライで変えず)；[N]全品詞①②(グライ・クライで変えず)；[小]全品詞①②(グライ)；[上]173は名詞は尾高型に限定して②(グライ・クライ)；[酒]名詞・形容詞はグライ，

								動詞はクライですべて②①, 全早なし; 独動詞・形容詞(「少し…ぐらいなら」で)両形 ・平板式：永84ソレグライナコト(平板), ヒャクエング˥ライ; 金2・金3名詞はグライで①②, 動詞・形容詞はクライで③, グライで①②, 金1名詞はグライで①②, 動詞・形容詞なし
(っ)け →た								
けど・けれど	ネ|コダケレド	ト|リダ|ケレド	フ|ムケレド	ノ|ル|ケレド	シ|ロ|イケレド	ア|カ|イケレド	協力型・順接用言尾高要求(注5参照)	・「けど」は金2; 他は「けれど」で掲載; ・動詞平板式：永89最後無声化する動詞はイクケ˥ドの旨注記 ・形容詞平板式：Nは-イ˥ケレド・-˥イケレドの順で掲載
こそ	ネ|ココソ	ト|リコ|ソ					協力型・順接コ˥ソ	秋n2など
ごと [全部]	ネ|コゴト	ト|リゴト					乗っとり型下げなし	秋n2など
ごと・ごとに・ごとの [毎]	①ネ|コゴトニ ②ネ|コゴ|トニ	ト|リゴ|トニ	フ|ムゴトニ	ノ|ルゴ|トニ	シ|ロ|イゴトニ	ア|カイゴ|トニ	①協力型・順接用言平板要求ゴトニ	・名詞起伏式の②は乗っとり型から協力型への変化のなごりの形か(名詞にだけ乗っとり型の形が残り, 動詞・形容詞は協力型) ・秋1・秋n2辞典本体①②の順, 小①②; 全Nなし
さ [終助詞]	ネ|コサ	ト|リサ	フ|ムサ	ノ|ル|サ	シ|ロ|イサ	ア|カ|イサ	協力型・順接用言尾高要求	新, 早
さえ	ネ|コサエ	ト|リサ|エ	フ|ムサエ フ|ミサエ	①ノ|ル|サエ ②ノ|ル|サ|エ ①ノ|リ|サエ ②ノ|リ|サ|エ	シ|ロ|イサエ ①旧 シ|ロクサエ ②新 シ|ロ|クサエ	①ア|カ|イサエ ②ア|カイサ|エ ア|カ|クサエ ア|カク|サエ	協力型・順接用言尾高要求サ˥エ 強調すると「サ˥エ	・3節(1)参照(平板式の語に対する②は強調形と見る) ・動詞平板式：秋1・秋n2終止連体形は辞典本体①②の順(ただし秋1表6は②のみ), 連用形は表6で①②; 全連用形①②両形; 金2①; 早終止連体形②, 連用形①; N清終止連体形なし, 連用形には①; 小連用形②①の順, 独両形 ・形容詞平板式：終止形は金2①と秋1・秋n2②, 連用形を掲げるのは金2全の-ク˥サエと清の-ク˥サエだが, これはともに①相当で, -˥クサエはクの無声化による下げの前倒しと見る
させる →せる								
ざる			ノ|マザ|ル	ノ|ラザ|ル			乗っとり型ザ˥ル	文語の助動詞のアクセントは秋n2 89項に記載あり
し	ネ|コダシ	ト|リダ|シ	フ|ムシ	ノ|ル|シ	シ|ロ|イシ	ア|カ|イシ	協力型・順接用言尾高要求(注5参照)	形容詞平板式：Nは--イ˥シ・-˥イシの順で掲載, 清は逆
しか	ネ|コシカ	①ト|リ|シカ ②ト|リシ|カ ③旧 ト|リシカ	フ|ムシカ	①ノ|ル|シカ ②ノ|ルシ|カ ③旧 ノ|ルシカ			協力型・順接①②用言尾高要求シ˥カ 強調すると「シ˥カ ③用言平板要求シカ	・3節(2)参照(名詞の①はシの無声化形, 動詞②は強調形と見る) ・秋1・秋n2小の③は他資料にも独にもなく旧形と思われる ・名詞平板式：秋1・秋n2③①の順; 金2①; 金3は①だが「何しか」はエシ˥カ; N上早辞②; 酒①②; 小は③だが, ①も注記, ただし「胃しか」はイシカとイシ˥カ; 清55は①②両形あげるが本人は②, 注11で③は「聞いたことがない」; 独①か②; 全なし ・動詞平板式：秋1・秋n2③①; N早①; 独①か②
ずに			①フ|マズニ ②新 ノ|マ|ズニ	ノ|ラズニ			乗っとられ型	・②がおそらく相対的に新形 ・動詞起伏式：神28, 金1, 秋1・秋n2上①; 林「書かず(に)」①で「返さず(に)」は②①; 小①②; 早②; 全Nなし; 独ほぼ② ・動詞平板式：独-˥ズニを使用/許容が各1名あり(乗っとり型)
すら →さえ							協力型・順接用言尾高要求	・秋1・秋n2表6①②(秋1辞典本体名詞のみ, 秋n2辞典本体なし); 金2連用形①; N清名詞のみ; 全酒小なし; 連用形は金2
ずらい			①ノ|ミズラ|イ ②ノ|ミズライ	①ノ|リズラ|イ ②ノ|リズライ			乗っとり型①ズラ˥イ②ズライ	・②は旧形か ・秋1・秋n2 54項(2)で②①の順, 辞①
ぜ	ネ|コダゼ	①ト|リダゼ ②ト|リダ|ゼ	フ|ムゼ	①ノ|ルゼ ②ノ|ル|ゼ	シ|ロ|イゼ	①ア|カイゼ ②ア|カ|イゼ		金2②(名詞不明); 秋1・秋n2②①の順(名詞なし); 早②(名詞+「だ」あり); 酒②(名詞なし); 新①(②)+疑問型上昇調等(形容詞なし)
せる/させる [使役]			ノ|マセ|ル	ノ|ラセル			乗っとられ型セ(˥)ル	秋n2など; さらに他の助詞・助動詞がつく場合については, 本表のそれぞれの項参照
ぞ [終助詞]	ネ|コダゾ	①ト|リダゾ ②ト|リダ|ゾ	フ|ムゾ	①ノ|ルゾ ②ノ|ル|ゾ	シ|ロ|イゾ	①ア|カイゾ ②ア|カ|イゾ	協力型・順接①用言平板要求②用言尾高要求(使い分けあり)	・3節(4)参照; **使い分け**：新発話内容の強めとして, ①+疑問型上昇調は注意喚起, 感情・感覚の述べ立て, 主張, うながし, ②は独自的で強い決意 ・金2②(名詞なし); 秋1・秋n2②①の順(名詞なし); 早②(名詞+「だ」あり); 酒②(名詞なし); 小形容詞①②の順
そうだ・そうな・そうに [推量]			ノ|ミソ|ーダ	①ノ|リソーダ (②新ノ|リソ|ーダ)	シ|ロソ|ーダ	①ア|カソーダ ②新 ア|カソ|ーダ	①乗っとられ型ソ(˥)ーダ ②乗っとり型用言平板要求ソ˥ーダ	・動詞平板式：①は秋n2表14など; ②は文献になく独による(これについては少数調査) ・形容詞平板式：辞②; 独ほぼ②; この語形を掲載する他の文献資料は①
そうだ [伝聞]	ネ|コダソーダ	ト|リダソ|ーダ	フ|ムソーダ	ノ|ルソ|ーダ	シ|ロ|イソーダ	ア|カイソ|ーダ	協力型・順接用言平板要求ソ˥ーダ	・秋n2など(「そう」で) ・形容詞平板式：独10・20・30歳台で-˥イソーダあり
た たら・たり・たっけ			フ|ンダ	ノッ|タ	①旧 シ|ロカッタ ②新 シ|ロ|カッタ	ア|カ|カッタ	協力型・順接用言平板要求	・形容詞起伏式：②は秋2・秋n2 52項に「近年, 若い人人の間では」として注記 ・**「たら・たり」**は-タ˥ラ・-タ˥リ(直前が低ければ˥は潜在化): N ・**「たっけ」**は-タ˥ッケ(直前が低ければ˥は潜在化): 金2辞典本体
だ・だと・だった・だって・だが・だから・だけど	ネ|コダ	ト|リダ					協力型・順接	秋n2など; **「だと」**は引用法ではダ˥ト N小独, 条件用法ではダ˥ト(平板：小), **「だった・だって」**は-ダ˥ッタ・-ダ˥ッテ N小, **「だが・だから・だけど」**は-ダ˥ガ・-ダ˥カラ・-ダ˥ケド：独(直前が低ければ˥は潜在化)
たい・たがる			ノ|ミタ|イ	①ノ|リタイ ②新ノ|リタ|イ			①乗っとられ型タ(˥)イ ②乗っとり型タ˥イ	・さらに他の助詞・助動詞がつく場合については, 本表のそれぞれの項参照 ・動詞平板式：神28, 金2, 秋1・秋n2全林酒上辞①型のみ; N①②の順; 林78で, 拍数が多いと②になりがち(「いただきたい」); 早は終止形②で連体形①; 独②(終止形のみ調査) ・**「たがる」**は動詞起伏式にはタガル, 動詞平板式には①-タガ˥ル, ②(旧)-タガル(平板)：金2①; 秋1・秋n2表11注で①②の順; 全①②両形; N上早独① ・**「たかった・たくて・たければ」**-タ˥カッタ・-タ˥クテ・-タ˥ケレバ

だけ・だけだ/が/に/は	①ネ|コダケ ②旧 ネ|コ ダケ	ト|リダケ	①ブ|ムダケ ②旧 ノ|ム ダケ	ノ|ルダケ	①シ|ロ|イ ダケ ②旧 シ|ロイ ダケ	ア|カイダケ	①協力型・順接用言平板要求 ②乗っとり型 ダケ↑ 強調すると ダ↑ケ↑	・起伏式：神43, 金1名詞②; 金2名詞・動詞②; 永34動詞②; 早 N は①; 秋1・秋n2名詞は「花だけ」②①, 「雨だけ」①②の順, 動詞・形容詞は②①の順; 酒②①の順; 金①②両形, 小①②の順; 清47に①が優勢と記載; 独① ・**「だけだ・だけが・だけに・だけは」**は-ダケ↑ダ-↑ガ-↑ニ-↑ワ(直前が低いと↑潜在化)：神44,永83(-ニ), 酒(-ダ), 小(-ワ), 清47, N[202, 218](-ダ); **「だけの」**は永34-ダケノ(平板); 注6参照
だって	ネ|コダッテ	ト|リダ|ッテ						・「だ」に「って」が低く続く：秋1・秋n2 N ・**「にだって」**は-ニ↑ダッテ(直前が低ければ↑は潜在化)：永93
たち	ネ|コタチ	ト|リ|タチ					協力型・低接	「ら」も; 秋1・秋n2 94項参照
たて			ノ|ミタテ	ノ|リタテ			乗っとり型 平板化	秋1・秋n2
たら →た								
だらけ	ネ|コダ|ラケ	①ト|リダ|ラケ ②旧 ト|リダラケ					①乗っとり型 ダ↑ラケ ②乗っとれ型 ダ(↑)ラケ	永79②; 金2②①; 秋1・秋n2①
だろう	ネ|コダロー	ト|リダロ|ー	ブ|ムダロー	①ノ|ル|ダロー ②旧 ノ|ル ダロ|ー	シ|ロ|イダロー	①ア|カ|イダロー ②旧 ア|カイ ダロ|ー	協力型・順接 ①用言尾高要求 ②用言平板要求 ダロ↑ー	動詞・形容詞平板式：金1・金2・金3②のみ 金2形容詞なし); 秋1・秋n2, 小②①の順, 特形容詞②; 新②; 酒動詞②のみ, 形容詞②①の順; N①②の順だが[221, 246]に②は「まれに」, 形容詞は-イ↑ダロー・-↑イダロー・②の順で掲載; 早 独①; 全なし
つつ			ノ|ミツ|ツ (ノ|ミ|ツツ)	ノ|リツ|ツ (ノ|リ|ツツ)			乗っとり型 ツ↑ツ	・-↑ツツはおそらく旧形：清48-↑ツツ聞かず「抵抗」あり ・金2↑ツツ; 秋1・秋n2は-↑ツツ・-ツ↑ツの順; N 早 独 清-ツ↑ツ; 全なし; 永83のシリツツ(平板)はさらに旧形か
って [引用]	ネ|コッテ	ト|リッテ	ブ|ムッテ	ノ|ル|ッテ	シ|ロ|イッテ	ア|カ|イッテ	協力型・順接 用言尾高要求	金2辞典本体; N形容詞平板式は-イ↑ッテ・-↑イッテの順で
て・ては・でも・てから/だけ			ブ|ンデ	ノッ|テ	→くて	→くて	乗っとられ型	秋n2など; **「ては・でも」**は-テ↑ワ・-テ↑モ(直前が低ければ↑潜在化): 酒 小(でも); **「てから」**は-テ↑カラ, **「てだけ」**は-テ↑ダケ~~テダケ(平板), **「てばかり」**は-テ↑バカリ~~テバ↑カリ: 秋1・秋n2 77項
てる			ブ|ンデル	ノッ|テル				小
で・では・でも	ネ|コデ	ト|リデ	→て	→て			協力型・順接	・秋n2など; **「では・でも」**は-デ↑ワ・-デ↑モ(直前が低ければ↑は潜在化)：神44,酒(でも), N[203]
でしょう [推測]	ネ|コデショー	ト|リデショ|ー	ブ|ムデショー	①ノ|ル|デ ショー ②旧 ノ|ルデ ショ|ー	シ|ロ|イデショー	①ア|カ|イデ ショー ②旧 ア|カイ デショ|ー	協力型・順接 ①用言尾高要求 ②用言平板要求 デショ↑ー	「だろう」の項参照
です	ネ|コデス	ト|リデ|ス			シ|ロ|イデス	ア|カ|イデス	協力型・順接 用言尾高要求 デ↑ス	・形容詞平板式：N-↑イデス・-イ↑デスの順(他項目と順序異なる) ・形容詞に「です」を直接つける言いかたは神38にもあり(アカ↑イデス)
てない →ない								
と・とか・とは・とも [列挙など]	ネ|コト	ト|リト	ブ|ムト	①ノ|ル|ト ②ノ|ル|ト	シ|ロ|イト	①ア|カイト ②ア|カ|イト	協力型・順接 ①用言平板要求 ②用言尾高要求	・**使い分け傾向**：引用用法と動詞の列挙用法では②が増え, 条件用法では①が多いか ・用法言及のないものとして, 動詞・形容詞平板式に対し金 酒 早は①, 秋1・秋n2辞典本体① ・**「とか」**は「と」が①の場合は-ト↑カ(↑は潜在化), ②の場合はそのまま平らに続く：名詞平板式はN①(列挙); 動詞・形容詞平板式は秋1・秋n2辞典本体で②①の順(用法言及なし); 独②(列挙) ・**「とは・とも」**は①の場合は-ト↑ワ・-ト↑モ, ②の場合はそのまま続く(↑は潜在化)：名詞平板式+「とは・とも」: 秋1・秋n2①(用法言及なし); 動詞・形容詞平板式+「とも」: 秋1・秋n2②①の順(用法言及なし); 永89②(シヌ↑トモ イキ↑ルトモ) **列挙**：動詞・形容詞平板式は秋1本体は用法言及なく①だが, 表6注2に「と(引用・列挙)」は②も; 金2本体②, 清動詞②
と [引用]	ネ|コト	①ト|リト 特ト|リ|ト						**引用**：秋n2表5・6注に「引用の『と』は平板式名詞/動詞には低く下がってつくことが多い」とあるが(つまり特および②), これはイントネーションのためか(3節(3)参照); 金2本体② ・名詞平板式+「と」: 独①多いが, 特も併用・許容の者複数あり ・名詞平板式+「だと」: 小②, 独②(ポーズ入れて①許容者あり) ・動詞・形容詞平板式：小①②
	ネ|コダト	①ト|リダト ②ト|リダ|ト						
と [条件]	ネ|コダト	①ト|リダト ②ト|リダ|ト						**条件**：名詞平板式+「だと」：小①; 独50歳台②（40歳台以下調査せず） ・動詞・形容詞平板式：金2辞典本体で動詞①; 小①; 上(条件法)動詞①, 形容詞①(②); 清動詞①(接続助詞); N動詞②①; 独10・30・50歳台各1名の調査では①②両形可
ど・ども			ブ|メド	ノ|ル|ド			協力型・順接	・秋1・秋n2 ・**「ども」**はドのあとにモをそのまま続ける：秋1・秋n2表2
どころか・どころの	①ネ|コ ドコロカ ②ネ|コ ド|コロカ	ト|リ ド|コロカ	①ブ|ム ドコロカ ②ノ|ム ド|コロカ	ノ|ル ド|コロカ	①シ|ロ|イ ドコロカ ②シ|ロイ ド|コロカ	ア|カイ ド|コロカ	①協力型・順接 用言平板要求 ②乗っとり型 ド↑コロカ	金2①; 秋1・秋n2 N 小 小は名詞なし)で①②の順
として [地図]	ネ|コトシテ	ト|リトシテ						N
な [禁止]			ブ|ムナ	ノ|ル|ナ			協力型・順接 用言尾高要求 (注5参照)	秋n2など

な [判断]	ネ|コダナ	ト|リダナ	ブ|ムナ	ノ|ルナ	シ|ロ|イナ	ア|カイナ	協力型・順接用言平板要求	・この上にさらに各種の文末のイントネーションがかかる ・秋1・秋n2, 真
ない			ノ|マ|ナイ	ノ|ラナイ			乗っとられ型	・さらに他の助詞・助動詞がつく場合は本表のそれぞれの項参照; 「なかった」は動詞起伏式には-ナカッタ: 独 ・秋n2など; 動詞平板式は早-ナイで, 「たい」の場合と同様, 形容詞平板式の新形に一致
			ブ|ンデ|ナ|イ	ノッ|テナ|イ	①旧 シ|ロク|ナ|イ ②新 シ|ロ|ク|ナ|イ	ア|カクナ|イ		・補助形容詞の「ない」が続く言いかた ・形容詞起伏式にはさらなる新形としてシロクナイなどの言いかたがあるが(N[245]参照), これはこの補助形容詞の「ない」が助動詞化する兆候と見ることもできる ・形容詞平板式：独10・20歳台②式の言い方あり
ながら			ノ|ミナ|ガラ	①ノ|リナガラ ②新 ノ|リナ|ガラ			①乗っとられ型 ナ(リ)ガラ ②乗っとり型 ナリガラ	動詞平板式：金2辞典本体で「すると同時に」①; 秋1・秋n2,全, 永82,酒,早,辞,小①; N①②の順; 清①②とも; 独両形あるが②が多数
	①ネ|コナガラ ②ネ|コナ|ガラ	①ト|リナガラ ②ト|リナ|ガラ					乗っとり型 ①…ナガラ ②…ナリガラ	金2①, 辞典本体は②も; 秋1・秋n2①②の順; 永82①; Nなし
なさい・な			ノ|ミナサ|イ	ノ|リナサ|イ			乗っとり型 ナサリイ	N, 「な」は秋n2など
など なんか・ なんて	ネ|コナド	ト|リナ|ド	ブ|ムナド	ノ|ル|ナド	シ|ロ|イナド	ア|カ|イナド	協力型・順接用言尾高要求 ナリド	金2辞典本体, 秋1・秋n2, 清形容詞平板式には-リイナド(イリナド); N,酒,小名詞のみ; 全,早なし
			ブ|ミナド	ノ|リ|ナド	→くは・くも	→くは・くも		金2辞典本体; 清(形容詞平板式連用形には-クナド)
なら・ならば	ネ|コナラバ	ト|リナ|ラバ	ブ|ムナラバ	ノ|ル|ナラバ	シ|ロ|イナラバ	ア|カ|イナラバ	協力型・順接用言尾高要求 ナリラ(バ)	秋n2表14など; Nは形容詞平板式+「なら」を-イナラ・-リイナラの順で掲載
なり [例示・也]	ネ|コナリ	ト|リナ|リ	ブ|ムナリ	ノ|ル|ナリ	シ|ロ|イナリ	ア|カ|イナリ	協力型・順接用言尾高要求 ナリ	・金2辞典本体, 秋1・秋n2(「也」は89項), 永80(例示), 小,清(清は形容詞平板式には-リイナリ(イリナリ)); N,酒なし ・動詞平板式:全のみナリもあげるが(イクナリ等), これは「なり」の意味を強く意識した言いかた(強調形)か
なりに・ なりの [程度・様態]	ネ|コナリニ	ト|リナリニ	ノ|ムナリニ	ノ|ルナリニ	シ|ロ|イナリニ	ア|カイナリニ	協力型・順接用言平板要求 平板	早(ナリニ); 金2辞典本体(名詞＋ナリ), 秋1・秋n2(同); Nなし
なんか →など								秋1・秋n2, 金2(形容詞平板式連用形には-クナンカ・テ); 清(形容詞平板式連用形には-クナンカ・テ); N名詞のみ
に・ には・にも	ネ|コニ	ト|リニ	ブ|ムニ	①ノ|ル|ニ (②ノ|ルニ)	シ|ロ|イニ	ア|カ|イニ	① 協力型・順接用言尾高要求	・動詞平板式の②は旧形と見るべきか, あるいは表現上の変種か: 神41②(イクニ カギル); 金2①; 秋1・秋n2表6に①②, 辞典本体①; 全①②両形; 早① 独①(20歳台1名②併用) ・形容詞平板式：神42(キモノワ カルイニ カギル) ・**「には・にも」**は-ニワ・-ニモ(直前が低ければ ｢ は潜在化)：神44,秋1・秋n2 77項,N[203],日1713,小
に [～行く]			ブ|ミニ	ノ|リニ			(備考参照)	・協力型・順接(用言平板要求)または乗っとられ型 ・秋1・秋n2表6注1,N
にくい			ノ|ミニク|イ	ノ|リニク|イ			乗っとり型 ニクイ	・明1・明n2 54項,N,辞
ね [終助詞]	ネ|コネ ネ|コダネ	ト|リネ ト|リダネ	ブ|ムネ ブ|ンデネ	ノ|ルネ ノッ|テ|ネ	シ|ロ|イネ	ア|カイネ	協力型・順接用言平板要求	・この上にさらに各種の文末のイントネーションがかかる ・金2,秋1・秋n2,全, 早,真(「名詞＋だね」も); 清(名詞) ・動詞+「て」：真, 独
の [格助詞]	ネ|コノ	ト|リノ					協力型 特殊	・「犬」「山」など尾高型の名詞の多くにはこの「の」は高いままつくが, 「次」「よそ」のように「の」が低くつく場合があり(秋n2 71項の注意②; 「地味」など尾高型の形容動詞語幹も: 林31), また「こと」「とき」のように低くつくことがある場合もある
の・のが [もの・こと]	ネ|コノ	ト|リノ	ブ|ムノ	ノ|ル|ノ	シ|ロ|イノ	ア|カ|イノ	協力型 特殊	・協力型の順接(用言尾高要求)に近いが, 尾高型の名詞には高いままつく点が特殊 ・**「のが・のだ」**は-ノガ・-ノダ(直前が低ければ ｢ は潜在化)
の [終助詞]	ネ|コナノ	ト|リナ|ノ	ブ|ムノ	ノ|ル|ノ	シ|ロ|イノ	ア|カ|イノ	協力型・低接	名詞に直接つかないが, 「有名な」など平板型の形容動詞には低くつくので, 協力型・低接と考えておく(2.3.2節参照); 真, 独
のだ・ ので・のに のです	ネ|コナノダ	ト|リナ|ノダ	ブ|ムノダ	ノ|ル|ノダ	シ|ロ|イノダ	ア|カ|イノダ	協力型・低接	・終助詞「の」と同じく低接と見る ・形容詞平板式：Nは-イノダ・-リイノダの順で掲載, 清は逆 ・**「ので・のに」**秋1・秋n2表6, 7, 8, N(動詞・形容詞); 酒,小(「**なので**」も); 早(名詞「だのに」で); **「のです」**酒
のみ	ネ|コノミ	ト|リノ|ミ	ブ|ムノミ	①ノ|ル|ノ|ミ (②ノ|ル|ノミ)	シ|ロ|イノミ	ア|カイノ|ミ	① 協力型・順接用言平板要求 (備考参照) ノミ	・①は秋1・秋n2, N,小(名詞のみ); 清(名詞・形容詞)で, ②は金2辞典本体, 全,酒,早なし ・②はもとは用言尾高要求であったことを示すか; すると①は助詞の強調形が固定化したもので, 意味の共通性がある「さえ・すら・より」と本来は同類と考えうる(3節(1)参照)
は	ネ|コワ	ト|リワ	ブ|ムワ	①ノ|ル|ワ (②ノ|ルワ)	シ|ロ|イワ	ア|カ|イワ	① 協力型・順接用言尾高要求	・動詞平板式の②は旧形または表現上の変種か：神41②(イクワ ヨリイガ); 秋1・秋n2表6①②, 辞典本体①; 金2,早,清①; Nなし ・形容詞：神42,金2, Nなし
			ブ|ミワ	ノ|リ|ワ	→くは・くも	→くは・くも		動詞平板式：神42(シリワ シナリイガ); 金1,金2,秋1・秋n2,全,N,酒,早,辞,清
ば			ブ|メバ	ノ|レ|バ	①旧 シ|ロケ|レバ ②新 シ|ロ|ケ|レバ	ア|カ|ケレバ	協力型・順接用言尾高要求	秋n2など
ばかり	①ネ|コバカリ (②ネ|コ|バ|カリ)	ト|リバ|カリ	①ブ|ムバカリ (②ノ|ム|バ|カリ)	ノ|ルバ|カリ	①シ|ロ|イ|バカリ (②シ|ロ|イ|バ|カリ)	ア|カイバ|カリ	①協力型・順接用言平板要求 ②乗っとり型 バカリ 強調すると「バカリ	・②は文献資料では少数派でほとんどが①と併用;おそらく旧形・起伏式：秋1・秋n2名詞①, 表5注で②も, 動詞・形容詞①②の順; 金1,酒名詞①; 金3名詞・動詞①; 金2,N,早,清名詞・動詞・形容詞①; 小名詞①②の順, 動詞は103で②; 辞名詞・形容詞①, 独動詞・形容詞① (20歳台1名のみ②併用) ・**「てばかり・とばかり」**：秋1・秋n2 77項でヒトトバカリ・ヒトトバカリ, ナイテバカリ・ナイテバカリ

へ・ へは・へも	ネ|コエ	ト|リエ					協力型・順接	秋n2など; 「**へは・へも**」は-エ˥ワ, -エ˥モ(直前が低ければ˥は潜在化)：神44; (秋1)・秋n2 77項参照)
べき・べし			①ノ|ムベキ ②ノ|ムベ|キ	ノ|ルベ|キ			①協力型・順接 用言平板要求 ②乗っとり型 ベ˥キ	金2 金3②(金3「べき」); 秋1・秋n2「べし」で①(89項(5)では②も); 神78「べく」について①になりがち; 酒「べきだ」で②①の順; 小「べき」で②; 全 N 早なし
ほど	ネ|コホド	ト|リホド	ノ|ムホド	ノ|ルホド	シ|ロ|イホド	ア|カイホド	協力型・順接 用言平板要求 平板	・秋n2など ・平板式の語+**「ほど」+助詞**は, 助詞が「ほど」と同じ高さでつく形(名詞「程」の性質を残す)と, 低くつく形がある：永アレホドノ, キータホドデモ(いずれも平板); 清62注8に「ほどで・ほどと・ほどに・ほどは・ほども」は「ほど」の後で下がらない; 早もあとの下げの印なし; しかし N[202, 218]に「ほどは」は下がる形と併記; 上あとの下げの印あり; 「**ほどだ**」も N[218]は下がる形ホド˥ダもあるとし, 酒は下がる形のみ
まい			ノ|ムマ|イ	ノ|ルマ|イ			乗っとり型 マ˥イ	秋n2など
ます・ ました・まし ょう・ません			ノ|ミマ|ス	ノ|リマ|ス			乗っとり型 マ˥ス	・秋n2など ・**「ました・ましょう・ません」**は-マ˥シタ・-マショ˥ー・-マセ˥ン
まで	ネ|コマデ	ト|リマ|デ	ノ|ムマデ	①ノ|ルマ|デ ②ノ|ル|マデ	シ|ロ|イマデ	ア|カイマ|デ	① 協力型・順接 用言平板要求 (備考参照) マ˥デ	・②は少数派かつ併用：②が本来の形(用言尾高要求)で, ①は助詞の強調形が固定化したものか(「のみ」の項参照) ・動詞平板式：金1・2・3 秋1・秋n2 N 酒 早 小①; 全 清①② ・形容詞平板式：金2 秋1・秋n2 早 全 N 清なし ・永85に「夜オソク˥マデ」の例あり
みたい・ みたいだ/な	ネ|コミタイ	ト|リミ|タイ	ノ|ムミタイ	ノ|ルミ|タイ	シ|ロ|イミタイ	ア|カイミ|タイ	協力型・順接 用言平板要求 ミ˥タイ	秋n2など
も	ネ|コモ	ト|リモ	ノ|ムモ ノ|ミモ	①ノ|ル|モ (②ノ|ルモ) ノ|リ|モ	シ|ロ|イモ →くは・くも	ア|カ|イモ →くは・くも	① 協力型・順接 用言尾高要求	・動詞平板式の②は旧形と見るべきか, あるいは表現上の変種か; 神41②(イクモ カ˥エルモ); 秋1・秋n2表6①②, 辞典本体①; 金2 早 酒 清①; 全なし ・形容詞平板式：秋1・秋n2表8, 全 神 金1・金2 全 早
ものか・ もんか			ノ|ムモ|ノ|カ	ノ|ルモノ|カ				名詞の「物」+「か」(モノ˥カ・モ˥ンカ)と同じ; 秋1・秋n2表6注5, 表5注4参照；**「ものの」**はモノノ(平板)
や	ネ|コヤ	ト|リヤ	ノ|ムヤ	①ノ|ル|ヤ (②ノ|ルヤ)	シ|ロ|イヤ	ア|カ|イヤ	協力型・順接 用言尾高要求	動詞平板式の②は旧形と見るべきか, あるいは表現上の変種か：神42(イクヤ イ˥ナヤ); 金2 秋1・秋n2 ①秋では動詞は「聞くや否や」で; **命令形+「や」**も①); N①(名詞のみ); 全なし
やら	ネ|コヤラ	ト|リヤ|ラ	ノ|ムヤラ	ノ|ル|ヤラ	シ|ロ|イヤラ	ア|カ|イヤラ	協力型・順接 用言尾高要求	金2 秋1・秋n2 永, 清形容詞平板式には-˥イヤラ(イ˥ヤラ)
よ [告知]	ネ|コヨ ネ|コダヨ	ト|リヨ ①ト|リダヨ ②ト|リダ|ヨ	ノ|ムヨ	①ノ|ル|ヨ ②ノ|ル|ヨ	シ|ロ|イヨ	①ア|カイヨ ②ア|カ|イヨ	協力型・順接 ①用言平板要求 ②用言尾高要求 (使い分けあり)	・3節(4)参照 ・この上にさらに各種の文末のイントネーションがかかる ・**使い分け**：やさしく教えたり反応を求める場合は①+疑問型上昇調で, 相手の意見との違いをはっきりさせたい場合は②の傾向(郡2020); 酒①+疑問型上昇調は注意喚起, 呼びかけ, 感情・感覚の述べ立て, 意見の主張, うながし, ②は反発をともなう述べ立てや主張, 行動要求をあらわす語について強く行動を要求 ・酒, 秋1・秋n2辞典本体①(動詞は表6で②も); 小 清①②(ともに形容詞平板式には①のみ, 小は名詞記載なし); 金2 全 酒, 早動詞・形容詞①; N なし ・**命令形+「よ」**は ノ˥メヨ, ノレ˥ヨ：秋1・秋n2 小 清, 起伏式の一段・サ変の「起きよ」はオ˥キヨ・オキ˥ヨ, 「調べよ」はシラ˥ベヨ・シラベ˥ヨ, 「愛せよ」はア˥イセヨ・アイセ˥ヨ：秋1・秋n2
よ [呼びかけ]	ネ|コヨ	ト|リヨ					協力型・順接	秋1・秋n2
よう →う								
ようだ・ ような/に			ノ|ムヨーダ	ノ|ルヨ|ーダ	シ|ロ|イヨーダ	ア|カイヨ|ーダ	協力型・順接 用言平板要求 ヨ˥ーダ	秋n2表14など
より	ネ|コヨリ	ト|リヨ|リ	ノ|ムヨリ	①ノ|ル|ヨリ ②ノ|ル|ヨ|リ	シ|ロ|イヨリ	①ア|カ|イヨリ ②ア|カイヨ|リ	協力型・順接 用言尾高要求 ヨ˥リ 強調すると 「ヨ˥リ	・3節(1)参照(②は強調形と見る) ・動詞・形容詞平板式：神39, 40①; 秋1・秋n2 ①②の順; 全 動詞①②両形, 形容詞①; N 酒 動詞②(形容詞なし); 早①; 小 形容詞②①の順(動詞なし); 清なし; 独両形あるが, 10・20歳台では①優勢
らしい [推測]	①ネ|コラシ|ー ②ネ|コラシー	ト|リラシ|ー	①ノ|ムラシ|ー ②ノ|ムラシー	ノ|ルラシ|ー	①シ|ロイ ラシ|ー ②シ|ロ|イ ラシー	ア|カイラシ|ー	① 乗っとり型 ② 協力型・順接 用言平板要求 ラシ˥ー 強調すると ラ「シ˥ー	・2形混用状態か ・名詞起伏式：秋1・秋n2 ①②の順; 早 酒 用法言及なく①; 小 ②①の順(用法言及なし); 全 ①②両形(用法言及なし); 金2①; N②; 独両形あり ・動詞・形容詞起伏式：永75①(「大抵」と注記)); 金2①; 秋1・秋n2辞典本体①②の順, 動詞は表10で②, その注で①も; 早, 酒①; 清②; N②; 全①②両形; 小②①の順(用法言及なし); 独両形あり
らしい [適切]	ネ|コラシ|ー	ト|リラシ|ー					乗っとり型 ラシ˥ー	秋1・秋n2 96項
れる/られる			ノ|マレ|ル	ノ|ラレル			乗っとられ型 レ(˥)ル	・さらに他の助詞・助動詞がつく場合については, 本表のそれぞれの項参照 ・秋n2表14など;
わ [終助詞]	ネ|コダワ	ト|リダ|ワ	ノ|ムワ	ノ|ル|ワ	シ|ロ|イワ	ア|カ|イワ	協力型・順接 用言尾高要求 (注5参照)	酒, 小(形容詞のみ)
を	ネ|コオ	ト|リオ	ノ|ムオ	①ノ|ル|オ (②ノ|ルオ)	シ|ロ|イオ	ア|カ|イオ	① 協力型・順接 用言尾高要求	動詞平板式の②は旧形と見るべきか, あるいは表現上の変種か：秋1・秋n2, 辞典本体①, 表6に①②; 早括弧に入れて①のみ; 独①(20歳台1名②併用, ②許容は他にもあり)